終戦と戦後処理

空襲の後片付けもままならない昭和20（1945）年8月15日、満州事変に始まり日中戦争、太平洋戦争と続いた戦争は日本の全面降伏で終結し、約6年にわたる豊川海軍工廠の兵器工場としての歴史も幕を閉じました。戦争の勝利を信じ日夜働いてきた工廠従業員らにとって敗北という形での終戦はそれぞれの思いがあったようですが、空襲の不安から解放されたことを安堵した人が多かったのも事実でした。

終戦後ほとんどの工員らは工廠を去っていきましたが、一部の工員は残務処理のために残り、米軍の接収作業に向けた残存機械・兵器・資材の目録作成などが行われました。9月には数名の進駐軍により豊川海軍工廠の空襲の成果の調査が行われ、10月から年末にかけて接収作業や兵器・弾薬などの処理作業が行われました。

体験者の証言

十月の初めの頃、遂に米軍接収がやって来た。将校二、軍曹一、兵約三十人の部隊で、それに通訳一人である。・・・・

体験者の証言

十四日の午後、総務部から通達がきた。「明日十五日十二時、かしこくも天皇陛下の玉音放送が行われる。」・・・・